

# 住文化の英語学

## —建築工法と英語の階数表現—

松原 健二

### 第1章 はじめに

人間の生活において衣・食・住が何より重要であることは、今も昔もまた洋の東西を問わず普遍的な事実である。本稿でテーマとして取り上げる「住」、すなわち人間が生活をする家というものも、人類誕生と時を同じくして人が生活をする上で大きな課題となった。太古の昔には、洞窟などの自然の造形を利用して住の役割を担わせていたが、やがて人は自らの手で住むための家を造り出す技術を身につける。この住宅建築技術の修得により、技術や予算、あるいは政治や法律などの制約の範囲内であれば、人は自分の希望に合った場所を選んで好きな家を造る自由を得ることになる。

さて、あらゆる事物に名前が付けられたように、住宅や建築物をめぐる様々な材料や建築工法にも名前が付けられていくことになる。すなわち建築工法や建築材料の発見や発明に伴いそれらに名前が与えられ、ひいては建築工事に用いる各種の道具や、建築物内の様々な空間や部分に至るまで名前が付されていくことになる。

言うまでもなく同じ言語を用いる人々の集団において、同一の建築文化を共有するならば、当然のことながらそれらの建築物をめぐるさまざまな事物は同じ呼称で呼ばれることになる。しかしながら、現代英語においては実に興味深い事実が存在する。それは建築物の階数の呼び方についてである。一般にアメリカ英語では、一番下の階から順に 'first floor' 'second floor' 'third floor' と

呼ぶ。これは日本語における「1階」「2階」「3階」という呼び方と基本的に同じ番号の振り方である。ところが同じ英語でもイギリス英語では、一番下の階から順に‘ground floor’‘first floor’‘second floor’と名付けていくために、2階以上でアメリカ英語と一階分のズレが生じていく。すなわち、同じ‘first floor’という英語が、アメリカ英語では「1階」を指しているにもかかわらず、イギリス英語では「2階」を指すという奇妙な現象が存在する。先に「同一の建築文化を共有するならば、当然のことながらそれらの建築物をめぐるさまざまな事物は同じ呼称で呼ばれることになる」と書いたが、もしこの考え方が正しいならば、アメリカ英語とイギリス英語における階数の呼び方に明らかな違いが存在するという事実は、両英語圏の人々が「同一の建築文化を共有」していないことになる。

本稿では、英語における階数の呼び方の違いがなぜ両英語圏の間に生じてしまうことになったのかという疑問を、イギリスとアメリカの建築文化の歴史をたどることによって解き明かしていきたい。

## 第2章 石積みの家

イギリスをはじめヨーロッパの建築は、石積みが基本である。石積みの技術が紀元前の昔にまで溯ることは、古代エジプトや古代ローマが残した石造建造物の数々を見れば一目瞭然であろう。

一般に石積みの住宅は防寒性に優れ、寒い地方に向いている。イギリスやドイツなどの寒い地方で発達したのも、石やレンガの防寒性が屋内の室温を保ち、屋内の暖房効率を上げる断熱効果に優れていたからである。また石やレンガは耐火性にも優れているので、風が強い地域でも火事の危険から居住者や家財を守るのに適していた。ただし石積みの家は通風が確保しにくいために暑い地方には適さない。また湿度に弱く、地震にも脆いという短所を持つが、一般に気温、湿度共に低く、地震が少ないという北ヨーロッパにおいては最も適し

図1 石積み工法

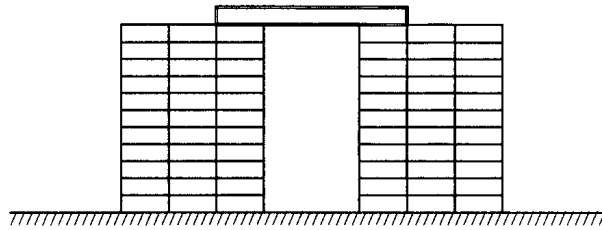
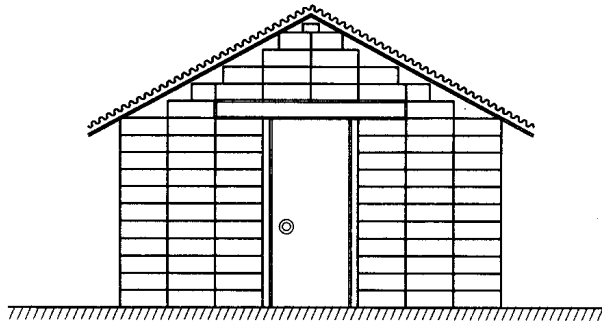


図2 石積みの家



た建築工法であったものと考えられる<sup>1)</sup>。

そこでヨーロッパでは、古代より一般住宅の建築材料としても石またはレンガが用いられた。ここでは、建築材料をレンガとして話を進めるが、石積み工法での建築は基本的に図1のような形で始められる。

石積みの住宅建築においては、まず出入口とする場所を決めておいてそこにはレンガを積まないようにしなければならない。出入口は、当然のことながら人が身体をおつけることなく出入りできるに十分な開口部が必要であり、ここにドアを取り付けるようになる。続いてドアの周囲に木枠を回して風の侵入を防いだり機密性を高めたりする技術が発達していく。(図2)

ここで留意しておきたい点は、「1階」が地面と同じレベルであるということである。出入口の開口部には何も積まないのであるから、当然のことながら

「1階」は ground level となり、それで 'ground floor' と呼ばれることになる。家の内外での段差がないので、人は靴を履いたまま家の中にまで入るといふ生活スタイルが定着する。

しかし、「1階」が ground level になることを可能にしたのは、ある意味では石やレンガの耐水性ゆえのことである。ところが木造建築の場合には、家屋の最も下の部分は雨や雪によって濡れることが避けられないために、耐水性に優れた石やコンクリートなどで基礎を打ち、その上に家屋を建てる必要が生じてくる。一方、石積みの場合にはその必要がなく、土の上にそのままレンガを積み上げていけば良いのである。レンガとレンガの間には隙間が生じるが、そこには目地を打つことによって風や雨の侵入を防ぐことができる。目地の材料としては、かつては漆喰が用いられたが、現代ではコンクリートを使うのが一般的となっている。

ここで、石積み建築と木造建築の違いを整理すると、表1のようになる。

表1 石積み建築と木造建築の違い

建築工法	耐水性	基礎の必要性	1階のレベル
石積み建築	強い	不要	地面と同じ
木造建築	弱い	必要	地面より数十cm上

### 第3章 アーリーアメリカン建築

前章ではイギリスなどのヨーロッパにおける住宅建築が、基本的に石積み工法で行われていたことを述べた。本章では、アメリカ開拓に始まるアメリカの建築物がどのような工法で建てられたのかを見ていくことにしたい。

17世紀にアメリカ開拓を始めた人々の中心は、イギリスのピューリタンである。彼らは船に乗ってアメリカ大陸に渡り、現在のボストンの南からニューイングランドと呼ばれる地域の開拓に着手する。そしてこの開拓の中で作り出さ

れていったのがアーリーアメリカン、またはコロニアルと呼ばれるスタイルであった。この建築は「ツー・バイ・フォー工法」という一種の木造建築であった。「ツー・バイ・フォー工法」とは、「2インチ×4インチ」の角材を構造材として用いて（図3）、その上に外壁用の板を張っていき、そのようにしてできた外壁に屋根を載せて家を造るという工法である（図4）。この工法は用いる角材を「2インチ×4インチ」のものに統一しているためにこの名がつけられたものだが、外壁の造り方に大きな特徴がある。それは「下見板張り」と呼ばれるもので、板を水平に張っていく、しかも少しずつ重ねながら張っていくという外壁の張り方であった。そのように板を張った上にペンキを塗ることによって、耐水性や耐久性のある外壁となるのである。

図3 アーリーアメリカン建築（ツー・バイ・フォー工法）の構造

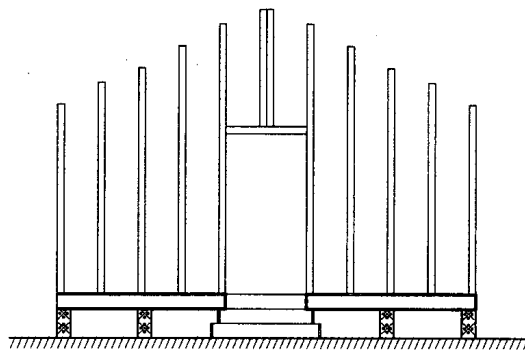
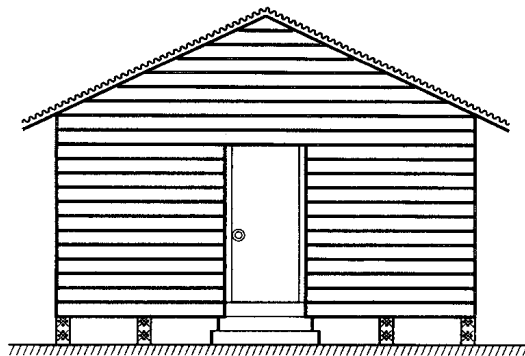


図4 アーリーアメリカン建築（ツー・バイ・フォー工法）



アメリカ開拓期においてこの建築工法が採られた理由としては、次のような理由が考えられる。まず彼らが質の良いレンガを作れなかったということ。レンガを焼くには窯が必要であり<sup>2)</sup>、開拓のかたわらに窯を造り、粘土をこね、焼いてレンガを作るなどという仕事をしている余裕がなかったことは想像に難くない。だから石積みの家を建てたくても建てられなかったのである。イギリスからレンガを輸入することも不可能ではなかったが、価格も高価で運搬も容易ではなく、実際には難しかったであろう。むしろ開拓のために切り倒した木を製材することによって柱や板を作り、それを利用する方がずっと効率的であったのである。

また、製材技術がそれほど高度でなかった開拓時代のアメリカにおいて、ツー・バイ・フォー工法というのは極めて便利な工法であったと考えられる。すなわち、材料として用いるのは基本的に構造材としての「2インチ×4インチ」の角材と外壁用の下見板のみであり、同じ木造建築と言っても、日本の木造軸組工法のように様々な種類の柱や板を準備しなければならないのとは大きな違いがある。その上、外壁工事の仕上げはペンキを塗るだけでよく、左官工事が不要な点でも楽な工法であったと言える。

イギリスからアメリカに渡った開拓者たちは、このような理由から石積みではなく、アーリーアメリカンと呼ばれるツー・バイ・フォー工法の木造住宅を建てることになる。ツー・バイ・フォー工法に用いられる下見板張りの技術は、イギリスにおいて石積みの家を持たない低所得者層の間に当時からあった技術だと言われているが、板を横目張りに張っていくというのは基本的に造船の技術である。無事に新大陸に渡ることを最優先に考えていた移民団は、必ず船大工を伴っていたという。したがって開拓者としてアメリカ大陸に降り立った彼らが、家や教会を初めとする各種の建築物を建てるのに用いた技術が造船技術の応用であったことは十分に考えられることである<sup>3)</sup>。

しかしここで石積みの時にはなかった新たな問題に直面することになる。それは、建物の基礎の問題である。前章でも述べたように、石積みの建築の場合

にはレンガ自体に耐水性があるために「基礎」という特別なものを考える必要はなく、地面の上にただ水平にレンガを積んでいけばよかった。しかしこれが木造となると、家屋の土台となる基礎部分が必要となってくる。地面に柱や板を直接差したり立てたりしようものなら、早晚風雨によって家屋がねじれたり崩れたりする恐れがあるからである。そこで、家屋本体の土台として石ないしはレンガを数十センチ程度の高さに積み、その上に木造の家を建てることになる。それが図4のようなツー・バイ・フォー工法のアーリーアメリカン建築である。

しかし基礎の問題が片付いた後で、もう一つ新たな問題が生じることになる。それは出入口をどの高さに設定するかという問題であった。この段階で出入口の高さ設定は、理論的には2通りが可能である。一つは日本の木造建築（図5）のように、出入口を地面とほぼ同じ高さに設定し、出入口内部に土間（玄関のタタキ）スペースを確保するという方法。この場合には、言うまでもなく出入口を入った後に1階のフロアレベル（破線部分）との間におよそ基礎の高さ分だけの段差が生じることになる。

図5 日本の木造建築（木造軸組工法）の構造

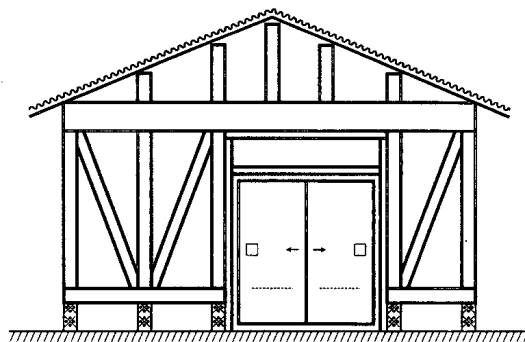
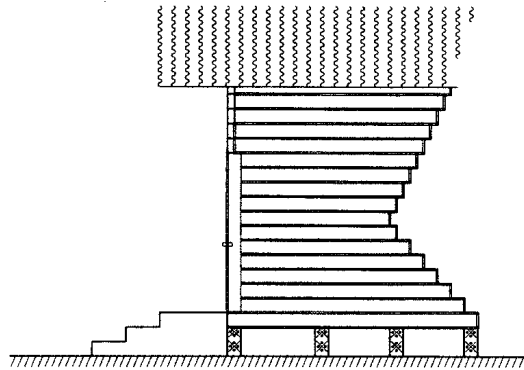


図6 アーリーアメリカン建築における出入口の高さ



もう一つの方法は、出入口の外側に階段と踊り場を設け、出入口の高さを1階のフロアレベルと同じに設定する方法である（図6）。日本の場合には、前者のスタイルを取ることにより玄関のタタキ部分を靴脱ぎ場とし、屋内では素足で過ごすという生活スタイルを確立したのであるが、アメリカの開拓者たちは後者のスタイルを選んだのである。これは、屋内で靴を脱ぐという生活習慣を彼らが持ち合わせていなかったためであり、換言すれば出入口と1階のフロアレベルは水平であるのが当然と考える文化を、ヨーロッパの石積み建築以来の伝統として引きずっていたためだと考えることができる。そしてこの出入口外側の階段と踊り場が面積を広げて作られるようになり、玄関前のウッドデッキとして発展していくことになる。

さて、ここで問題となるのが「1階」部分の呼び方である。石積み工法の場合には「1階」は *ground level* と基本的に同じであり、それで '*ground floor*' と呼ぶことができた。ところがアーリーアメリカンスタイルという木造建築になって基礎を設けたことにより、「1階」部分のフロアレベルが *ground level* ではなくなってしまったのである。およそ基礎の高さだけ「1階」部分のフロアレベルが地面より高くなったのである。そのために「1階」部分は '*ground floor*' ではなく '*first floor*' と呼ばれるようになったものと考えられる<sup>4)</sup>。



## 第4章 結語

従来、我国の英語教育の現場では、アメリカ英語とイギリス英語における階数の呼び方の違いは、「単なる違い」として教えられるのみであったものと思われる。実際に私もそのように違いを説明するだけに留まっていたし、私の周囲の多くの英語教師も同様であった。

しかし本稿で考察してきたように、アメリカ英語とイギリス英語における階数の呼び方に明らかな違いが存在するという事実は、単に偶発的に発生した違いではないものと考えられる。もともとは同じくイギリスで英語を使って暮らしていた人々が、アメリカ大陸に移住することによって住文化の変革を余儀なくされ、その過程で階数の呼び方の違いが必然的に生じてきたものと考えられる

図7 階数の呼び方の英米語比較（従来）

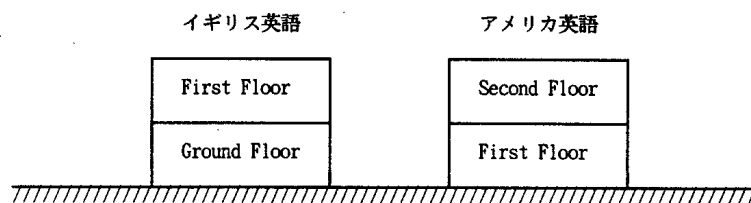
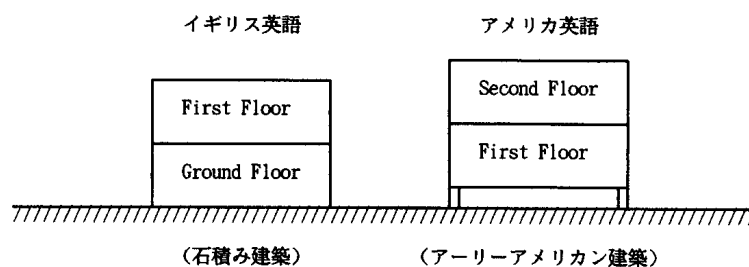


図8 建築工法と階数の呼び方の英米比較



のである。すなわち、従来は図7のように全く同一の建築物であることを前提に階数の呼び方を比較していたために、それが単なる言語上の違いに収束されて解釈されてきた。しかし実際には家屋の基礎部分の存在の有無という大きな違いがあり、図8のように基礎部分の有無を考慮に入れて英語での呼び方を捉えるべきであったのだ<sup>5)</sup>。

第1章で触れたように、同じ言語を用いながらも違った表現方法を取るということは、やはり建築文化に差異のあることを物語っており、その差異から言語表現上の違いが必然的に導き出されたものと考えられる。そして、アメリカでは、開拓時代以降に石造建築が可能になったり、建築工法に多様な発展があったにもかかわらず、言語表現としては「1階」のことを‘first floor’と言う階数表現が定着していったものと思われる。

私たちは時として言語をそれ自体独立したものとして考えてしまうことがあるが、言語は必ずそれを用いる人々の文化を背景に持ち合わせている。同じ英語でも地域によって表現方法の差異が認められる場合には、単なる言語上の違いとして表面的に解釈するのではなく、その背景にある文化的な事柄を深く考えてみる必要があるであろう<sup>6)</sup>。

## 謝 辞

本稿の執筆に当たっては、多くの方の助言をいただきました。英語および社会言語学的側面、そして論文全体の構成については近藤富英先生（信州大学）に細かいアドバイスをいただきました。また建築工法、とりわけツー・バイ・フォー工法については浅井清氏（浅井木材（株））に理論的・実践的指導をいただきました。

英語および英語以外の外国語については、それぞれ次の専門家の方々に教をいただきました。

◇英 語：David Ruzicka 先生（信州大学）

◇ドイツ語：中野和朗先生（松商学園短期大学）、大島春子先生（信州大学）

◇フランス語：滝澤 壽先生（信州大学）

◇スペイン語：曾根尚子先生（信州大学）、橋本エリサ先生（信州大学）

ご助言、ご助力をいただいた上記の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。

注)

- 1) 日本でもよく知られている童話『三びきの子ぶた』は、もともとイギリスの民話である。この話には子ぶたの三兄弟が登場し、それぞれ家を造るに当たって長兄はワラで、次兄は木の枝で、そして一番下の弟はレンガで造る。早々に家造りを終えた兄たちは、こつこつと時間をかけてレンガで家を造っている弟をばかにしているが、その後狼が出現するため、家の中に逃げ込むもののすぐに吹き飛ばされて食べられてしまう。弟だけがレンガの家で身を守ることができるのである。

この話が民話としてイギリスに生まれ、その後も童話として子供たちに読み伝えられてきている背景には、ワラや木の枝で家を造るのはたやすいが風や火に弱くて耐久性に欠ける、やはり家はレンガで、手間暇をかけてもしっかりと造らなければいけない、という考え方があるものと思われる。この考え方は、イギリスの気候風土に根ざした住宅建築に対する一般的な考え方を反映しているものと言えるだろう。

- 2) レンガには、窯で焼いて作るものの他に、日干しレンガと呼ばれるものがあるが、強度や耐久性の点において、窯で焼いたものとは比較にならない。
- 3) アメリカ開拓時代の住宅建築事情に関しては、藤森照信（1988）を参考にさせていただいた。
- 4) 英語での階の呼び方について、たとえば伊藤健三他監修『新英語要覧』（1992, P61）には次のような記述がある。

「この起源は中世にさかのぼります。その頃のヨーロッパはまだ大変不穏な世の中でした。城や領主の館では敵の襲来に備えて1階に出入り口を設けず、地上から階段を設けて2階へ直接出入りしていました。したがって最初に出入りする階すなわちファーストフロアーは、2階だったというわけです。（中略）一方、アメリカはずっと後から誕生した国ですので、彼らが建築物を造ったときはすでに出入り口が1階になっていました。したがって、階の呼び方は日本と同じです。」

しかし、城や領主の館以外の一般住宅では敵の襲来に備える必要はあまりなかったであろうし、「1階」に出入り口があったであろうから、この説はやや説得力に欠けるように思われる。

またイギリス出身の David Ruzicka 先生（信州大学）は、この問題に関して次のような推論を寄せて下さった。

“I don't know why 1F was called the ground floor in UK and Europe. BUT I de-

veloped a theory about it during a class last year ! My idea is that, up to certain point in history, the ground floor was used for carriages and horses....Because the first floor was this entrance for the horses, the counting started from the first floor above the ground. But then perhaps they had horses in America too ? The other idea is that... in the days before sewage systems were properly developed, all the stuff that now disappears underground was actually flowing down open sewers in the street. Hence the ground level was not a good place to live. So again this is an attempt to argue that the counting starts from 2F because no one lived on 1F. But this might all be wrong. ”

上記のように、David Ruzicka 先生の推論には2つがあり、一つは「昔は馬や馬車のために1階部分が使われていたために、人間の居住用としては2階以上が用いられた。したがって人間が住む階から番号を振り始めたのではないか」というもの。今一つは「下水設備が整備されていなかった当時は、1階は排水などがむき出しで流れるような汚い場所であった。だから2階以上に住み、階数の番号もそこから振った。」というものである。

これらの推論は大変興味深いものであるが、1階部分には人が居住していなかったことを前提とした推論であり、やや無理があるように思われる。しかし上記の記述でも明らかなように、英語の母語話者の間にも、この言語表現の違いに関しての定説はないようである。

- 5) 一般にヨーロッパの言語では、1階のことを「地上階」あるいはそれに類する呼び方をし、2階以上の階に「1」から順に番号を付した階数表現をする。これは、石積みという共通の建築文化が同種の言語表現に発展していったものと考えられる。
- 6) 同じ言語でありながら地域によって階数表現が違う例は、スペイン語にも見られる。一般にスペインや中南米、カリブ海地域では1階のことを 'piso bajo' (地上階) または 'planta baja' (低い階) と呼び、2階のことを 'primer piso' と呼ぶ。しかしチリにおいては 'primer piso' と言えば、1階を指すらしい。英語以外の言語にもこのような例が見られることは、大変興味深いことであり、それぞれの地域の生活文化や住宅の建築工法との関連を連想させる。

### 引用文献

伊藤健三他監修／伊村元道他編 (1992) 『新英語要覧』大修館書店

### 参考文献

藤森照信「西洋館の受け入れ方」(1988)『異文化への理解』東京大学出版会

森はるな「三びきのこぶた」(1990)『ママ よんで！ ディズニー名作童話①』講談社